



皆さんがこのコラムを読んでいる頃は、あの恐ろしかった出来事もすっかり「過去のこと」になり、話題になることも少ないのかもしれないと思いつつも、やっぱり西宮に住む私としては書かずにいられないので、今回は「恋愛」をちょっと離れてしまつてを許してください。

京都の皆さんはその時、何を思ったのだろうか？1月17日の午前5時46分。

私はどういふ訳か、その10秒ほど前(だと思つ)に目が覚めて、時計を見、窓の外を一瞥したのだ。『どうしてこんな時間に目が覚めたのだろうか？』と不思議に思いつつ、もう一度眠ろうとベッドに身を沈めたその時、ぐらりときたかと思つと、そのあとは強烈な衝撃。ミキサーの中でのめちやくくちにシェイクされているような揺れ。そしてすさまじい音の洪水。

ようやく揺れがおさまった時、夫は窓を開け、外の様子を見て、青ざめて言ったのだ。『何が起こつたんだ？』私も外を見て、唖然とする。停電してしまつた薄暗い町。アパート、家など、木造の建物が悲惨なほど崩れてしまつた光景があり、人々の助けをを求める声や家族を呼び声が飛び交い、マンションの非常ベルが鳴り響き、ガスの匂いが立ちこめていた。

私は震えながら、夫に「電話！」と言ひ、彼はリビングへと向かつたけれど、「電話がない」と答える。私がりびんクを見つめると、全ての家具が倒れ、

軽い物は数メートルも吹っ飛び、足の踏み場もないほど。電話なんてどこにあるかわからない。

冷静に見ると、寝室だつて、タンスなどが倒れ、めちやくくちだつたのだ。重いピアノまでが移動している。私の仕事部屋も、キッチンも、ひどい状態。冷蔵庫も洗濯機も倒れ、電子レンジは1メートルほど飛んで、向かいの壁に穴を開けている。

「外へ出よう。ここは危険だ」と彼が言い、私たちは着替え、外へ出た。1階の駐車場にはマンションの人たちが集まっている。隣の倒壊したアパートの人がやつてきて、大きな声で言った。「助けてください。両親が生き埋めになつていゝんです」数人が助けに行く。

私たちは濫区に独りで住んでいる私の母が気がかりだつたので、車に乗り込んだ。道路はひどい状態だつた。電柱が倒れ、崩れた家がせり出して道をふさいでいる。鉄筋のマンションも無惨に崩れ、斜めになったり、横倒しになつたり。そしてあの有名な高速道路横倒しの現場も通る。地震後、わずか30分のことだつた。

私は夜が開けていく町を見ていた。車の助手席で、震える指に、煙草を挟んで。ラジオでは「大阪では、地震に驚いて外へ出た主婦が転んで怪我をしたもようだ」などと悠長なことを言っている。

私は思った。ああ、ラジオの向こうは、日常の世界なのだ、と。ついで1時間前まで、私もそこにいた。お洒落をし、スポーツカーで仕事に出かけ、レストランで食事をし、お酒を飲む生活。ところが今、私の目の前には、いくつもの死がある。倒れた高速道路の下敷きになつて数台の車。崩れたマンションや家の下にいるはずの人々。亡くなった人のうち、自分が突然の

死を迎えるなど予想した人がどれだけいるだろう。誰だつて、自分が死ぬなんてことを、それも突然それが起こるなんてことを、日常の中で考えたりしないものだ。

4年前、私は軽井沢で自動車事故に遭つていゝ。車がスリップして崖から転落し、2回転半するという大事故だつた。それ以来、私はどこかで自分の突然の死を意識するようになつていゝ。つまらないことだと笑う人もいゝかもしれないけれど、それはどういゝことだ。たとえば、夫と大喧嘩をしたとしたら、仲直りを翌日まで延期しない。次の朝、喧嘩したままで別れて、私が突然死んでしまつたとしたら、彼はどれほど大きな後悔に駆られるだろうと思つからだ。あるいは私自身が、自分が死んでしまつと理解する一瞬に、激しい後悔に襲われるだろうから。

今回の地震で、妻を亡くした男性が、涙ながらに語つていた。こんなことなら、もつと妻を大切にしておけば良かった、と。そういう後悔は、大切な人を亡くしてしまつたという悲しい事態を、もつと悲劇的にしてしまつ。彼は長い間、二重の苦しみを背負うのかもしれない。

今回の地震で直接大きな被害を受けなかつた人も、5千もの突然の死から、何かを学ぶべきではないだろうか。なぜなら突然の死は、誰の身にも、起こる可能性があるのだから。その現実を、今回の惨事は教えていると思つた。

【プロフィール】  
1965年生まれ。同志社女子大学卒、株 電通ブックス勤務を経て、現在コピーライター。広告のほかFM ラジオ番組のシナリオや出演もこなす。著書に「ありふれた無邪気が罪になる」(PHP研究所)、「キスマで待てない」(大和書房)など。

MARUOKA IZUHO



ハッピーワグドドマークス